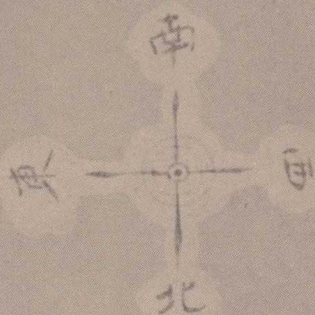
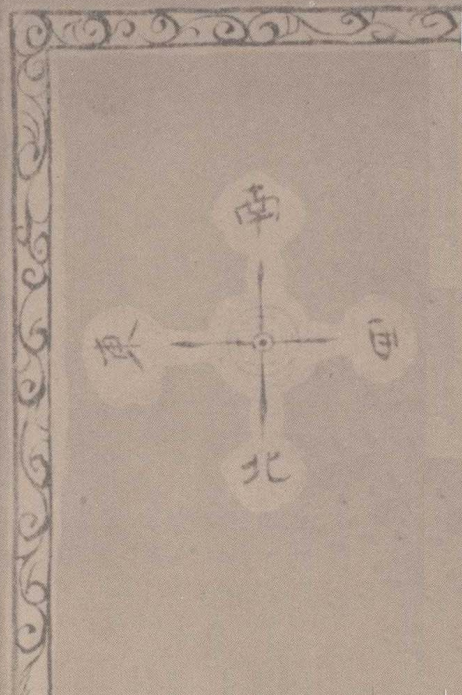


写真で見える 大衆文学事典



南國太子記

直木三十五



写真で見る

大衆文学事典

興津 要

桜 楓 社

興 津 要 (おきつかなめ)

大正13年生まれ

昭和24年早稲田大学文学部国文科卒業

現 在 早稲田大学教授

専 攻 日本近世文学

主要著書

「転換期の文学—江戸から明治へ」(早稲田大学出版部)

「明治開化期文学の研究」(桜楓社)

「落語—笑いの年輪」(角川書店)

「最後の江戸戯作者たち」(実業之日本社)

「異端のアルチザンたち」(読売新聞社)

写真で見る大衆文学事典

株 式 会 社 桜 楓 社	101 東京都千代田区猿樂町二ノ八ノ十三 電話(二九二)五六六一	著 者 興 津 要 発 行 者 及 川 篤 二 印 刷 所 第 一 印 刷	定 価 一 二 〇 〇	昭和五十三年一月五日	初版印刷
				昭和五十三年一月十日	初版発行

まえがき

少し前ならば、丹下左膳といえは大河内伝次郎、旗本退屈男といえは市川右太衛門、いまならば眠狂四郎といえは市川雷蔵、銭形平次といえは大川橋蔵などのイメージがパツとうかんでくる。つまり大衆文学の場合、どうしても、そういう舞台や映画のイメージときりはなしてはかんがえられない傾向にあるようだ。また、本書をお読み下されば、「愛染かつら」にしても、「魔像」にしても、「雪之丞変化」にしても、原作と映画の関係の深さがおわかりかねがえると思う。そこで本書では、原作のイメージと劇化、映画化されたもののイメージを二重写ししながら大衆文学をたのしくみていこう。（目次には、初版本、初出の新聞、雑誌を使用した）

大衆文学史については、尾崎秀樹さんの詳細な研究があるので、ここでは、そのアウトラインだけを展望して本書の概説にかえよう。

江戸時代後期、寛政の改革を境にして企業化された江戸の出版界には、流行作家の山東京伝、曲亭馬琴、十返舎一九など、稿料生活をおくる職業作家があらわれ、かれらは、作家としての

主体性を放棄し、大衆への娯楽提供者になったわけだが、ここに菊池寛のいう「需要者側の要求する文芸」という大衆文学の性格が早くもあらわれていた。

近代の大衆文学の源流は、明治十年代末からの講談や人情斬の速記で、明治中期には、村上浪六や塚原洪柿園の作品が人気をよんだ。

明治三十年代の徳富蘆花の「不如婦」、菊池幽芳の「己が罪」により、時代小説中心から恋愛小説、家庭小説にも範囲がひろがった。

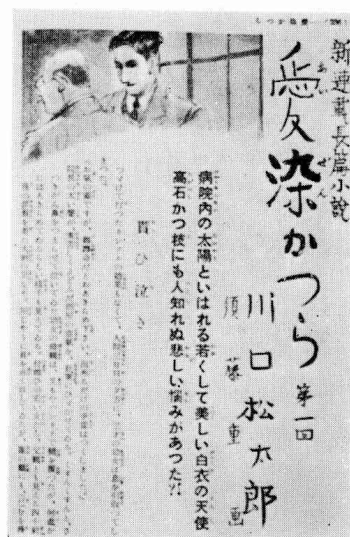
明治末期から「立川文庫」など書きおろし講談がおこり、大正初期には、「講談倶楽部」を中心に、平山芹江、長谷川伸などの「新講談」がつづいて大衆文学の隆盛をみた。

大正末期、中里介山の「大菩薩峠」が評判になり、大正十四年、白井喬二たちが大衆作家の社交機関「廿一日会」を設立し、翌年、機関誌「大衆文芸」を創刊してこのジャンルを確立した。（もちろん、ここにいたる過程に、大正十三年六月、春陽堂の「読物文芸叢書」刊行、大正十四年一月の「キング」の創刊などもみおとせないが……）かくして、作家には、直木三十五、長谷川伸、大仏次郎、吉川英治、子母沢寛、山本周五郎、村上元三、山手樹一郎などが輩出し、大正末期以降、菊池寛、久米正雄、中村武羅夫、加藤武雄、吉屋信子、川口松太郎らもくわわり、ユーモア小説の佐々木邦や獅子文六なども活躍した。

戦後には、田岡典夫や山手樹一郎の剣をぬかないユーモラスな時代小説が一時流行したが、

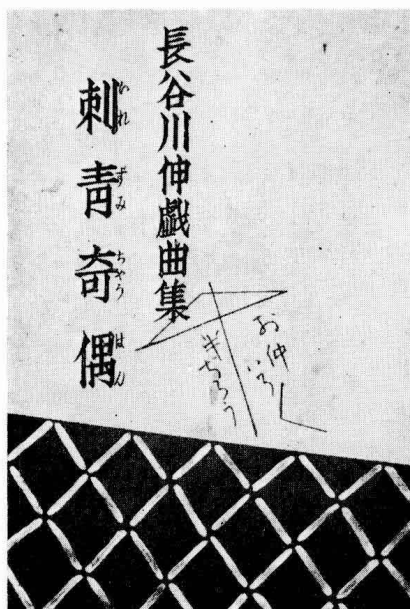
その後、柴田錬三郎の眠狂四郎というユニークな人間像が登場したり、山田風太郎のSF的忍法帖もあり、山本周五郎のマゲをつけた現代小説の感ある庶民の哀歓をえがく作品群、司馬遼太郎のあたらしい歴史小説、源氏鶏太の佐々木邦にくらべて社会的ひろがりをもつユーモア小説、星新一たちのSF小説、梶山季之^{としゆき}などの産業スパイ小説など、従来みられなかったヴァリエティにとんだ傾向の作品があらわれている。

写真で見る大衆文学事典 目次



23
27
31





35
39
41





45
49
51



特別讀物

口笛を吹く武士

林 不忘
堂本印象畫



讀 小説

ガラマサどん

エレベーター
事件



「これは特別讀物だから」

と云はれながらも、私も昔はこの頃で、

てゐる。僕は別に「事件」を「事件」で

た。これは、新聞の「事件」の「事件」

十位ばかりは、新聞が「事件」を「事件」

「事件」を「事件」

佐々木 邦
細木 青起 畫

「これはガラマサどん」

「これをガラマサどん」

「ガラマサどん」

「ガラマサどん」

「ガラマサどん」

「ガラマサどん」

「ガラマサどん」

「ガラマサどん」

「ガラマサどん」

「ガラマサどん」

「ガラマサどん」

「ガラマサどん」

「ガラマサどん」

「ガラマサどん」

「ガラマサどん」

53
55
57



杏掛時次郎

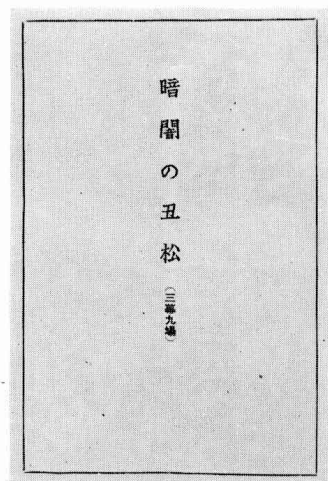
他五篇

長谷川伸 著

柳 貞出版



61
65
67





69
73



75



自由學校

五十二次

野矢氏著

金家藏

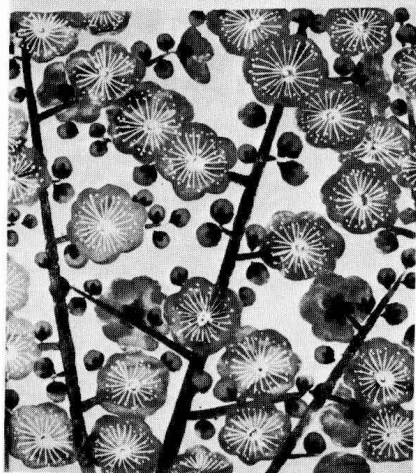
用印

[illegible]

新吾十番勝負

川口松太郎

(一) 美女丸の巻



85

89



93



